

現代会計と財務諸表論
—再構成可能性を問う—

中央大学公開セミナー（2012年12月16日）

駒澤大学 石川純治

1 問題提起—金融商品の時価会計は財務諸表全体のなかでどう再構成可能か

※10年余り前の論考がベース→その見方は今日においても基本的に変わっていない。

2 資産分類と測定基礎—基本枠組みの変容

収支計算の枠組み（寫村）：拙著①図表 10.1

収支計算+公正価値計算（後者の前者への浸透・拡大とその優位性）：図表 10.2

3 資産の会計的評価と制度的規定性—制度中立でない

a) 従来型：制度適合性＝（名目資本維持による）処分可能利益の算定→②収支的・利益計算の構造→資産評価（非貨幣資産＝原価評価）…（a）フロー先行（フロー配分→ストック）

b) 今日型：制度適合性＝財務的実態・リスクの開示志向（財務透明性）→②資産評価（特定資産＝時価評価）→③（収支の制約を受けない）結果的な利益計算（評価損益）…（b）ストック先行（ストック評価→フロー） ※規定関係が逆になる

a) と b) のハイブリッドな形→日本版概念フレームワークでの「苦心の計算構造」（別紙1）
※別紙1：2つの中心観のギャップ→その他の包括利益（補足2の注17参照）

4 連携の型とB/Sの2つの型—図表 10.4

P/L中心型（動的連携）→P/L連結型B/S：資本利益計算

B/S中心型（静的連携）→情報提供型B/S：実態リスク開示

5 財務諸表論の再構成可能性

図表 10.5：一元的利益計算会計と多元的情報開示会計→再構成可能か

補足1 「2つの整合性問題」という視点—拙著②図表8-2（別紙2）

補足2 拙著①の注書き

- ・注(8)寫村理論での一時所有の有価証券の扱い、※別紙3：寫村と「リスクからの解放」
- ・注(11)「優先して適用」の意味合い：「企業会計原則」との関係
- ・注(17)第2のP/L（その他の包括利益）の性格：実態開示と利益計算とのギャップの現れ
- ・注(19),(20)実態開示と（旧）商法290条の場合：時価会計と配当問題（cf.課税問題）
→連結（投資情報）と単体（利益算定）の混同、従来の繰延（擬制）資産との異同、開示規制と配当規制とのギャップ

〈関連資料〉

① 拙著『時価会計の基本問題』（中央経済社、2000年）第10章（263-74頁）

② 拙著『変貌する現代会計』（日本評論社、2008年）第8章（図表8-1～8-4）

別紙1：苦心の計算構造—融合の仕掛け（放送大学第11回でのスライド）

別紙2：2つの整合性問題（同スライド）、別紙3：リスクからの解放（同スライド）

▶ 苦心の計算構造－融合の仕掛け ◀

- 融合の形－2つの中心観
 資産負債中心観(外枠)と収益費用中心観(内容)
- 二層の形－外枠と内容
 「純資産－包括利益」の中に「資本－純利益」

	B/S	P/L
{ 資産負債中心観 → 収益費用中心観 →	純資産 資本	包括利益 純利益

(包括利益 = 期末純資産 - 期首純資産)
 (純利益 = 収益 - 費用)

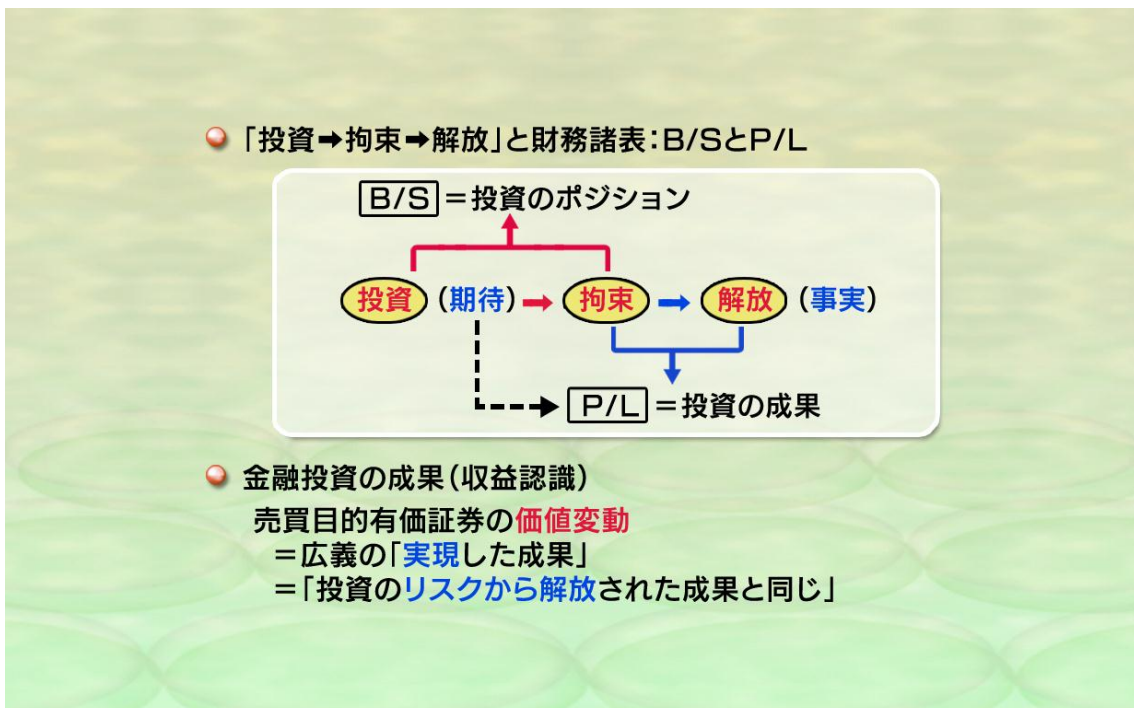
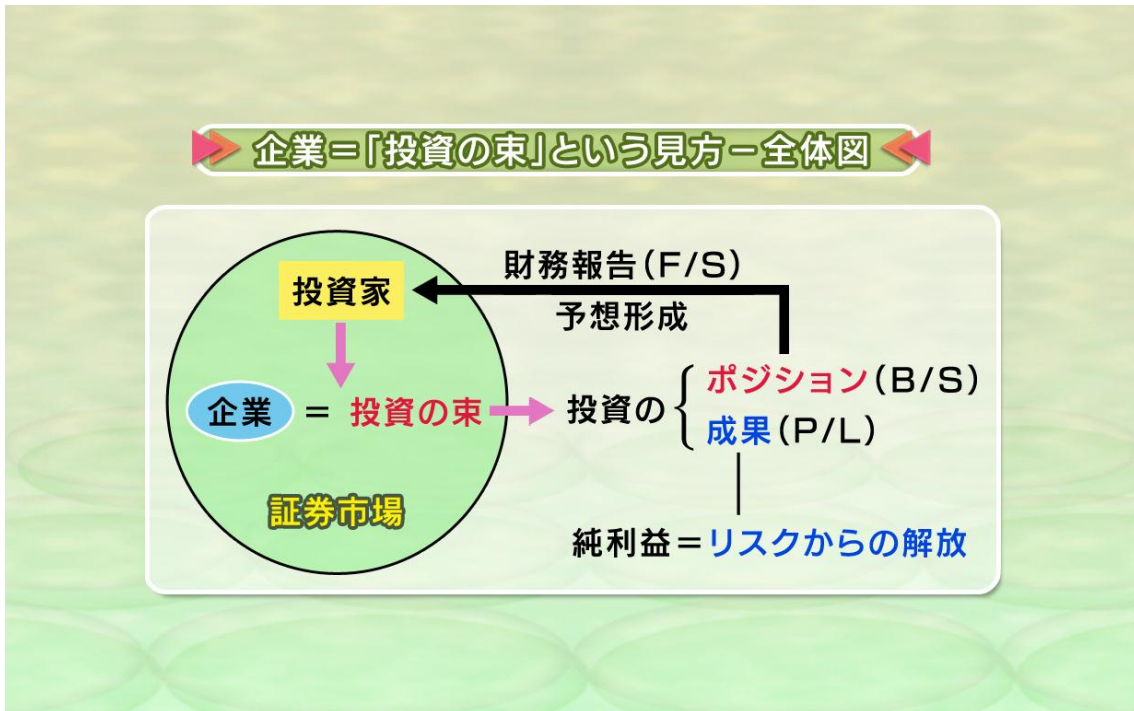
3. 「企業会計原則」をどうする

▶ 2つの整合性問題 ◀

A 従来の会計ルール B 新たな会計ルール

(旧)商法 ↔ 企業会計原則 概念フレームワーク ↔ 国際会計基準

(収支的期間損益計算)



1. 会計枠組みの今目的変容

▶ 計算枠組みは1つ? ◀

伝統的な「**配分計算**」(フロー配分)の枠組み: **系 I**

今日的な「**価値評価**」(ストック評価)の枠組み: **系 II**

〈2つの特徴比較〉

特徴 枠組	①ストックフロー の関係	②計算の基点	③会計枠組み の思考	④将来収支 の確定性	⑤資産・負債 の評価	⑥簿価決定 のあり方	⑦利益決定 のあり方
系 I	フロー志向 (フロー→ストック)	当初認識時	配分	確定的	原価・ 償却原価	連続・ フロー配分型	フローの 配分計算
系 II	ストック志向 (ストック→フロー)	特定時点 (再測定)	価値評価	不確実	時価 (公正価値)	非連続・ ストック評価型	ストックの 評価差額

別紙4-2 (参考)

2. 変容の構図-形と方向

▶ 方法と対象のハイブリッド構造 ◀

会計の方法…系 I (フロー配分)と系 II (ストック評価)

会計の対象…実物(モノ)系と金融(マネー)系

対象 \ 方法	系 I	系 II
I 実物(モノ)系 (実物経済)	(イ)	(ロ)
II 金融(マネー)系 (金融・証券経済)	(ハ)	(ニ)

(イ) → (ロ) ステージ2 (虚線矢印)
 (ハ) → (ニ) ステージ1 (実線矢印)

補遺：本当に役立つとは—基礎理論の重要性

(中略) 本書は必ずしもそういう「会計＝ビジネスのスキル」といったところに力点があるわけではありません。放送大学が(大学院を除いて)すべて教養学部だからというわけではありませんが、「教養」という点に力点があります。いわば「教養としての会計学」、これを目指しています。スキルという側面だけでは、真の意味での「教養」の中心にあるものに必ずしもつながってこないと考えるからです。本当に役立つとは、逆説的ですが、すぐには役立つものといえます。本当の「教養」とは、そういうものだと思います(ここでいう「教養」の意味については、コラム1を参照)。

(齋藤・石川『社会のなかの会計』NHK出版、2012年、まえがき)

12/7 (夕刊)

ノーベル医学生理学賞選考委員長 事務局長
山中教授の受賞語る

山中教授が、マウスでのiPS細胞(人工多能性幹細胞)作製成功を発表したのは、2006年8月。発表から6年での授賞について、同賞の歴史の中でも「最も早いケースのひとつ」と話した。その上で「細胞にはリセットボタンがあるという根本的な発見

を評価した。技術の確かさやコンセプトの正しさなど、すべてがこの6年で証明された。授賞をこれより遅らせる理由はなかった」と称賛した。

今回の授賞は、iPS細胞の開発という基礎的な業績を評価したもので、再生医療への本格的な応用などには、時間がかかると考えられている。その点について、ハンソン事務局長は、50年前に同賞を受けたDNAの構造発見を例に挙げて「当時は何の役にも立たないと言われたが、今やDNAに関係しないものは何もないほど幅広く医療に応用されている。選考委員会は先見の明がないといけない」と期待感も表明した。

(ストックホルム・下司佳代子)

ヨラン・ハンソン教授

(中略) 08年にノーベル化学賞を受賞した下村脩名誉教授(ボストン大学)は、40年以上も前の当時を振り返って「役に立つとはまったく思っていなかった」と述懐されている。その研究が、今日、がんやアルツハイマー病などの医薬品開発に大きな貢献をしているわけだ。日頃、学生たちには「本当に役立つのは、今すぐには役立つものではない」と言っているが、今すぐ役に立つものばかりに目を向けがちなだけに(それは明日には役に立たなくなる)、そうした姿勢が大切に思える。本来、学問とは今すぐに役立つというものではないのである。

(石川『変わる会計、変わる日本経済』日本評論社、2010年、「今、大切なことは」227頁)

補遺：拙著『時価会計の基本問題』第10章の図表（12月17日早稲田での話しの資料）

